

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號六第 卷三十五第

月二十年六十和昭

## 論 叢

支那の二五減租問題……………

經濟學博士 八木芳之助

生産の理論の一節……………

文學博士 高田保馬

ナチス勞働時間保護の原理……………

經濟學士 中川與之助

獨占的競争企業とその規模……………

經濟學士 大塚一朗

普通銀行の金融機構に於ける機能とその統制……………

經濟學博士 小島昌太郎

## 時 論

長期總力體制の確立と「いへ」の論理……………

經濟學博士 石川興二

## 研 究

愛知縣毛織物工業における金融……………

經濟學士 田 杉 競

テニルゴの精神進歩の理論……………

經濟學士 出口 勇 藏

## 說 苑

支那の工業合作運動について……………

經濟學士 菊田 太郎

## 附 錄

外國雜誌論題

本誌第五十三卷總目錄

## テュルゴの精神進歩の理論

出口勇藏

十七・十八世紀のヨーロッパに於いて體系づけられた精神諸科學、従つて經濟學が一つの獨立の科學として登場した時にはその一翼としてであつたところの精神諸科學は、一括して「精神科學の自然的體系」と呼ばれてゐる。經濟學に於ける諸々の主要なる概念や範疇の背後には、この體系を一貫してゐる若干の基本的な思想があつた。その著しいものとして、「人類の聯帶性」(La solidarité de genre humain)「進歩」(Le progrès)「自然的秩序」(Ordre naturel)などが數へられるのであらう。私がここで取上げようとするのは、それらの中での一つ、「進歩の理念」(Idée de progrès)と云ふものである。この理念が特に近代的な歴史觀に於いて根本的なものであることは、近世の歴史哲學の代表的な二三のものを想ひ浮べるだけで充分である。また、近世的な意識をもつ人々の言語の中に、思索の内に、この理念がわれ知らず深く根を下ろしてゐることに氣付かない人はないであらう。十八世紀に於いて西洋の何人からも等しく一樣に承認を受けてゐた進歩の理念とは、人間精神、人間精神の様々な營み、人間の社會が、時間の経過と共に繼續的に直線的な價値の増大を齎し、或時代はそれに先立つ時代の成果を受け取りそれに一層多くの價値を附け加へて、更にそれ以上の價値が生産さるべく次の時代によつて受け繼がれると云ふことであつた。しかるに、フランス革命を契機として、この單純な進歩思想は反省を加へられ、様々な修正が施さ

れるやうになつた。ヘーゲルに於ける辯證法的運動によつて進歩は云はば圓環的な姿をふくみ、また、ランケの「あらゆる時代は直接に神に接する」と云ふ思想<sup>1)</sup>によつて、時代が以前の時代と以後の時代との中間的なたゞ経過的なものと考へられるのではなく、それぞれに個有な独自の精神的傾向をもつものであることが認識せられるやうになり、この問題の更に具體的な解決は現代の歴史哲學の主要な課題の一つとなつてゐる。しかしながら、忘れてはならないことは、進歩思想がいかに修正を受けるにせよ、その本質が全く没却されたと云ふのではなくて、必ずや新しい歴史觀の内に包み取られてゐると云ふことである。實に「進歩の理念」は近世の社會が、一層正確には—後に述べるやうに—近世のヨーロッパ社會が、人類に遺した偉大な思想の産物の一つであつた。

「進歩の理念」に關する歴史的研究に我々はこと缺かない<sup>2)</sup>。ここでその理念の系譜が述べられようとするのではない。たゞテュルゴと云ふ一人の偉大な思想家の青年時代の書きものを通して、彼に於ける「進歩の理念」も亦、純粹にヨーロッパ的な性格をもつてゐたと云ふことを明かにして、從來のヨーロッパでの研究では見落されざるをえながつた側面にふれようと思ふのである。また社會思想はすべてその時代の課題を解かうとすると一般に云はれるであらうけれども、テュルゴのこの場合には、それが如何に現れてゐるかを検討しようとするのである。蓋し、かう云ふ見方が、現在の我々の主體的認識のために、必要であるからである。

## 二

ここで取扱はれるテュルゴの書き物について一言しておかう。彼は一七四八年、二十二歳のときに、ソルボンヌ神學院(Maison de Sorbonne)に入り、やがて僧院長(prieur)になつてゐた。當時彼が執筆したいと思つてゐた著述のリストが残つてゐるが、それは文學・宗教・哲學・數學・物理學・倫理學・經濟學・政治學と云ふ多方面な部門に亙つてゐて、早熟であつた此天

1) Ranke; Ueber die Epochen der neueren Geschichte, Erster Vortrag.  
例へば、J. Delvaile; Essai sur l'histoire de l'idée de progrès (1910), J. B. Bury; The Idea of Progress (1921), 田邊壽利「フランス社會學史研究」(1931).

オの據地が偲ばれる。彼はボニーエ (Bossuet) の『世界史論』(Discours sur l'histoire universelle) に對して、純粹に宗教的な立場からは人類の行進は充分に描寫し説明しえないと云ふことを發見し、進歩の一層合理的原因を探究してゐたのであつた。テュルゴが「歴史哲學を現世化した」<sup>3)</sup>と云はれてゐる所以であらう。たまたまソアッソンのアカデミーが一七四八年に懸賞論文を募集したのが契機となつて、彼は「科學および藝術の進歩と衰頹との原因に關する研究あるひは人間精神の進歩の歴史に關する省察」(Recherches sur les causes des progrès et de la décadence des sciences et des arts ou réflexions sur l'histoire des progrès de l'esprit humain) と云ふ斷片的な論文を書き、それを基として、翌年のソルボンヌの講演會 (Sorbonniques) に二つの論文を發表した。初めのが「キリスト教の成立が人類に齎した利益につゞき」(Discours sur les avantages que l'établissement du christianisme a procurés au genre humain) であり、次のが「人間精神の繼續的進歩の哲學的敘述」(Tableau philosophique des progrès successifs de l'esprit humain) である。その他、彼は一七五一年には、『政治地理學に關する著述の二つ』(Plan d'un ouvrage sur la Géographie Politique) を執筆し、『世界史に關する二つの論文の二つ』(Plan de deux Discours sur l'histoire Universelle) 同年頃のものと云はれてゐる。——私がテュルゴに於ける「進歩の理念」を探ねようとするのは、主として以上の文獻を通じてである。

さてテュルゴの進歩に關する思想は、彼の次の敘述に於いて端的に云ひ現されてゐる。

「自然現象は、變はらない諸法則に従つて、常に同じ一つの變革範圍の内に閉じこめられてゐる。すべて再生しては消えて行く。さうして、植物や動物が生れかはるところの相つづく幾世代に於いて、時が行ふ事柄は、瞬間ごとに、それが消滅させてしまつたものの形象を再び生かすことだけである。

これに反して、人間の繼承は世紀から世紀へと常に變つた光景を示してゐる、理性・情熱・自由は絶えず新しい出來ごとを生む。あらゆる時代は、世界の今の状態をそれに先き立つすべての状態に結びつけるところの因果連關によつて、相互に結びついてゐる。言語および文字と云ふ自由な符號は、人間に向つて彼等の觀念の保有を確かめまたそれらを他人に傳へる方法を與へることによつて、個々人のすべての知識から一つの共同の寶庫をつつたのである。その寶庫を、世紀ごとの發見によつてふやされる相續財産のやうに、一つの世代は他の世代に傳へてゆく。そこで人類は、その起源よりこの方を考へると、哲學者の目には、それ自ら各個人のやうに幼年時代と進歩とを有つてゐるところの一つの巨大なる全體 (un tout immense qui, lui-même, a comme chaque individu, son enfance et ses progrès) として現れるのである。<sup>4)</sup>

3) Oeuvres de Turgot (par G. Schelle) Tom. I. p. 115.

4) Dilthey; Ges. Sch. Bd. I. S. 99.

1) Turgot; cit. op. p. 214, et seq.

このやうに人間は言語と文字とを持つものとして、それを「殆ど無限にふやす能力を持つ」ものとして、自然と異つて、先立つ世代の成果を繼承しまた更にその寶庫を豊かにしつつ、次の世代に譲り渡してゆく。「人間の進歩の情熱との、および情熱がつくつたところの出來ごととの連續的な結合が『人類史』を形づくるのであつて、そこでは各個人は一つの巨大なる全體の一部分であるに過ぎない。」<sup>2)</sup>さうしてこれが「哲學者の見た歴史」すなはち歴史、哲學なのである。テュルゴはかく歴史を觀じた。進歩の理念が歴史に於ける所謂 *the latent Idee* として明白に規定されてゐるのを我々は見なければならぬ。しからば進歩とはいかなる時にもいかなる場所でも必然的に生ずるものであるであらうか。いなさうではない。後で述べるやうに、歴史は場所によつて異なつた進歩の姿を呈してをり、また衰頹 (*la decadence*) や固定 (*le fixe*) の現象を現してゐるのであり、また時によつても進歩の否定が人類社會に於いて實證せられるのである。にも拘らず、「人類は嵐吹く海の水のやうに、擾亂の中に恒に同一であり、恒にその完成へと進みゆく。」<sup>3)</sup>

しからば進歩を齎したまた逆に衰頹を生みあるひは人類を固定せしめるのは、そもそもいかなるものであるのか。テュルゴの考によれば、進歩や衰頹を生ぜしめる原因は三つ——第一、民衆 (*peuple*) の言語の状態。第二、政治組織 (*la constitution du gouvernement*) 平和・戦争・賠償・王侯の天才 (*le génie des princes*)<sup>4)</sup>・天才の運 (*le hasard du génie*)。第三、デカルト・コロンブス・ニュートン等。——である。先づ言語や文字の所有が人類の進歩に對して有つ基本的條件であることは、先の比較的長い引用句から直ちに了解されるであらう。しかし「言語の状態」とは何であるのか。このことおよび第二の原因として掲げられる「政治組織」その他を明かにするために、我々は先づ第三の原因の説明から始めるであらう。それはデカルトやコロンブスやニュートン等、云ひかへると天才の

2) p. 276.  
3) p. 277.  
4) p. 117.

ことである。

テュルゴは簡潔に書いてゐる。「自然はあらゆる時代にまたあらゆる場所に、殆ど等しい間隔を置いて、一定数の天才を蒔く。その天才達を教育や出来ごとが發展させたり、薄命のうち埋めたりするのである」と。<sup>5)</sup>地球の上のあらゆるところに、いつでも、天才が自然によつて蒔かれてゐると云ふこの思想は、「自然的體系」に特徴的な「自然の秩序」や「人類の聯帶性」を素朴に表現してゐると云はなくてはならぬ。さうしてこの思想がまたテュルゴの進歩思想の大前提でもあるのである。人類に進歩を齎すものは他ならぬこの天才である。「偉大な人は人間の精神に新しい道を開く」と書かれてゐる。<sup>6)</sup>併しこの天才をしてその能力を發揮させるかあるひは無名の内に朽ちさせるかは、一に懸つてその天才の環境(circumstances)に依るのである。彼の環境は彼にとつて偶然的なものであるから、それは環境の遇然(Le hasard des circonstances)と呼ばれてもよい。環境の遇然とは一言で云へば、上の引用句から判るやうに、教育と出来ごととを指す。さうして之がやがて、先に保留しておいた第一および第二の原因の説明となる筈である。言語が或程度まで進歩してゐなければ天才は文藝の傑作を創造することはできないであらう。もしもコロンブスが夭折してゐたら、恐らく我々は未だアメリカを知らないであらう。専制政治の下に於いては、自由が存在しないのであるから、學術は眞に進歩しうるものだらうか。

ここに一言つけ加へておかねばならぬのは、氣候の人間精神に對する影響についての當時喧傳されてゐた理論に對して、テュルゴが適切なる批判を行つてゐることである。彼は風土論に答へて曰ふ。

「ひとは、經驗によつて、種々な國民の間に、氣候の影響にのみ歸せられるやうな心や精神についての差別を發見することが正當にできると想つてゐる。だが私は答へるであらう。第一に、道德的原因(les causes morales)を抜きにしてはじめて、

5) ibidem  
6) cit., op. p. 134.

せめてもこの物理的原因に依らなくてはならないであらう。事實が道德的原因によつては絶対に説明できないと云ふことが確かめられてゐなくてはならないであらう、と。第二に、私は「答へるであらう」、ひとが事實をそれらの原因を判断できるやうな仕方でも熟考してゐるとは思はない。だから敢へて云ふなら、精神の諸作用を生み、措擧の趣や性格を形づくべく競合する諸要素の結果だけしかひとは見てゐないのである、と。ところが注意してもらひたいのは、物理的原因が直接に關係するのは、我々に氣がつくところの結果、すなはちこの措擧、この性格とはなくして、全部がこの結果に競合するところのかくれたる諸原理 (les principes cachés) とであるだらうこと、而してひとがその原理の洞察に達しうるのは、非常に緻密な分析によつてのみである、と云ふことである」

テュルゴが環境の人間精神に對する影響の内、自然的なものよりも「道德的」社會的原因を重視してゐるこの事實は、未だに我々が人々に對して深甚なる注意を要求せねばならぬ事柄に屬してゐる。現代の風土論に對して、それがたゞ自然的原因にのみ據つてゐると云ふのは、誤解ではあらう。けれどもそれが社會關係から離れて論じてゐると云ふことに對しては、我々は正當に抗議を申込むことができる。また露骨に自然的原因に據ると強辯する考へも現代には尠くはない。例へば「土地」や「血」あるひは地政學に於けるやうに「土地と血の一體」(Bruit und Boden) の一面的な影響を見定めることによつて、社會や人間の姿が全面的に解かれると主張するが如きである。これらは單に經濟的な社會關係のみによつて決定され、その他の一切はその反映でしかないと考へるのよりも、更に抽象的な見方であると云はねばならぬ。テュルゴによつて提出せられた「かくれたる諸原理」は、未だに「非常に緻密な分析」によつて我々の認識の光に照らされてゐると云ふことはできないであらう。テュルゴの主張は現在も猶ほ我々を鞭つと云へよう。

さてしかし天才は唯々「環境の偶然」に醜弄されてゐるだけではない。彼が「人間精神に新しい道を開く」ところに、歴史の進歩はある。「變化するこの全環境の中にあつて自分の關心事(Objet)を知りうるためには、何と

7) cit. op. p. 140. テュルゴが言及してゐる風土論者は、Dubos と現代の最も優れた天才の一人「すなはち Montesquieu とである。尤も後者が必ずしもことに云ふ風土論者でなかつたことは、すでは研究されてゐる。(前掲) フランス社會學史研究」(参照)

天才が必要なことか！」とテュルゴは云ふ。<sup>8)</sup> ひととはこゝにヘーゲルの歴史哲學に於ける「世界史的英雄」を思ひ浮べないであらうか。而して私はヘーゲルとの比較に資するために、今一つのことを歴史の推進力に關して述べなければならぬ。歴史の進歩は、たゞに天才の自由や理性からのみ齎されるのではない、それはまた「情熱」によつてである。テュルゴはこの情熱について、次のやうに書いてゐる。「常に必要であり、また人類が完成すればするほど發展する溫和なる情熱 (Les Passions douces) と云ふものがある。人類には野蠻時代に多く發展してゐるところの、憎しみや復讐のやうな荒々しい怖しい他の情熱がある。それらもまた自然であり、従つてまた必要でもある。それらの爆發は溫和なる情熱に立ち返らせ、それらを矯正する。丁度、良い酒の醸造のためには、ひどい醗酵が缺きえないやうなものである。<sup>9)</sup> この言葉をヘーゲルの「歴史に於ける偉大なる事柄は情熱なしに成就されたことはない」と云ふ有名な言葉と比較するがよい。さうすれば、甚だしい類似と、にも拘らず、重要な一つの相異とが見出されることであらう。重要な一つの相異と云ふのは、テュルゴに於いては情熱と云つても「溫和なる」すなはち人間の理性に耳傾ける情熱であるに對して、ヘーゲルに於いては、情熱は人間の理性を越えそれを包み取つてゐる「世界精神」の「奸計」によつて練られるそれであると云ふことである。云ひかへれば、テュルゴは「悟性」の立場に、ヘーゲルは「精神」の立場に立つてゐるのである。

最後に私は歴史の進歩を阻み歴史を衰頹せしめ固定せしめるやうな人間精神や社會について述べなければならぬ。それが「環境の偶然」によることは勿論であるけれども、それをテュルゴは一般的に次のやうに述べてゐる。「眞理の進歩を妨げるものは誤謬ではない。政治の進歩をおくらせるものは戦争や革命ではない。」實際、人類の歴史は誤つた認識や社會の攪亂やに満ちてゐる。しかしそれを通じて「平靜と動亂、善と惡との交代を通じて」

8) cit. op. p. 136.

9) cit. op. p. 284.



偉大なる完成へと徐々に行進するのである。眞に進歩を阻害するものは、實は、「放逸」(a mollesse)或は「沈滞」(l'entêtement) 舊慣墨守の精神 (l'esprit de routine) および不活動 (l'inaction) に致らしめる一切のものである」<sup>10)</sup>

以上の敘述で以て、我々はテュルゴの「進歩の理念」を一般的に學びえたかと思ふ。人間の理性に對する萬腔の信頼から生ずる強烈なる自負とそれから生ずる透徹した歴史認識とに於いて、我々は啓蒙思潮の特色を見るべきであらう。しかしテュルゴに於いてはいま一つの重要な側面が注意されなければならない。彼はダランベールと共に、ディルタイによつて、實證主義を基礎づけた人と呼ばれてゐる。彼の實證的精神は、彼が雄々しくも「私は唯々事實、そのものを、だけ根據とするであらう、<sup>11)</sup>」と宣言してゐることからも一應は想像しうるところであるが、「進歩の理念」に於いてこれを實證しなくてはならない。その課題を私は、進歩の理論を精神の進歩と社會の進歩との二つの部分に分けて、次に果たさうと思ふ。尤もこの二つの部分は、即ち精神とその環境とは、テュルゴの先の思想からも明瞭に察せられるやうに、相互に限定し合ふ關係に立ち、一方は必ず他を豫想し、他はまた一方によつて限定されるところに眞の人類の進歩があるのであるから、兩者は引き離しえないものである。けれども精神と環境とは、互に他によつて置換へられ他から導き出されるものではないからして、精神と環境であるのである。ゆゑに私のこの試みは無意義ではないはずである。

### 三

ジョン・ロックの經驗論を感覺論に更には唯物論にまで發展させたのは、フランス人であつたと云はれてゐる。我々が問題にしてゐる年若いテュルゴは感覺論者であつて、既に述べたところからも推察されるやうに、唯物論者ではなかつた。彼は「感覺の混沌」の内に「理性の萌芽」を發見する。それは神慮が、我々に欲望を感得させ

10) cit. op. p. 133, p. 215.

11) Dilthey; Ges. Sch. Bd. II. S. 313

12) Turgot; cit. op. p. 195.

ることによつて、智慧深くも遠大な方法をかくし、そのために人間は感覺を外界の事物と關係づけなければならなかつたからである。感覺は外物の運動によつて觀念を生む。觀念は存在に「名稱」を與へ、「抽象作用」がはじまる。言語と云ふ符號が發生する。するとますます觀念は増加し複雑となる。<sup>1)</sup>更に文字が發明される。これは「貴重なる發見」である。「文字の發見によつて、人類の初めの内はゆるやかな行進は、時と共に、無智から離れてゆく。」<sup>2)</sup>之が人間精神の進歩の最初の相である。この状態からの精神の無限の進歩を、テュルゴは科學や哲學について、藝術について、技術 (*les arts mécaniques*) について、また道德や政治について、語つてゐる。我々は彼のこれらの點に關する思想のあらましを次に述べるであらう。

科學と哲學——すべて科學の進歩のためには時と共に累積する「經驗あるひは實驗 (*Experimentos*) の源泉」が必要である。物理學が十七世紀まで實驗に基礎づけられなかつたのは、後述する技術が或程度の完成に達しなかつたからである。この科學に於いて最初に「古代の權威を振り落した」のはデカルトであつた。さうして此科學に於ける進歩の過程は「假設の吟味」と云ふことにある。歴史と云ふものは、文字が發明されるまでは、詩句を記憶する容易さや國民の虛榮心が、記憶すべき彼等の行動を歌に換へさせてゐたのである。現在の未開人の歌謡、ヘブライ人の歴史書の中に見える頌歌、支那人の詩經等はいかう云ふものである。文字が發明されてからも、最初の歴史は、神話的なものが存在してゐると考へられて、事實の歴史と混同されてゐた。それは、「帝國や藝術や風習などの起源についての無智を補ふために同じく發明された作り話である。その誤謬を認識することは極めて容易である。」歴史のために眞實を語る必要をはじめて感じたのは、テュルゴによると、ヘロドトスであつたと云ふ。形而上學の進歩のために特に必要なのは、精神の自由と云ふことである。さうして從來、「分析の法則」が知

1) cit. op. p. 299, et seq.

2) cit. op. p. 218.

られてゐなかつたために、ひとは形而上學と物理學とを混同し、兩者の進歩をおくらせてゐた。この混同からそれらを最初に分離せしめたものも、デカルトであつた。巴里をはじめとする各地に於けるアカデミーの設立は、科學や哲學に對しては「やせた谷を肥やす堰き止められた水源のやうなものである。」<sup>3)</sup>

かくて、一般に人間の認識活動は、次のやうな段階を経て進歩すると云ふことができる。これはコントの「三状態の法則」の先驅をなすものとして思想史の上で有名なものであるから、長過ぎるうらみはあるけれども、左に掲げ、立ち入つた分析はこれを後日に期すことにしよう。

「物理的な作用相互の關係が知られる以前には、それらが我々の眼に見えずしかも我々に似てゐる睿智的な存在によつて創られたものだと思像することほど、自然なことはなかつたらう。なぜなら、その存在者は「(人間以外の)何に似てゐたのであらうか。人間が與らずして生じた凡てのものは、それぞれ神を持ち、その神に對する恐怖や希望はやがて祭りを行はしめた。さうしてこの祭りがまた、強力な人に對して懐きうる尊敬をこめて想像せられた。なぜなら、神々とは、最も強力な、さうして人類の眞の完成へのみちすがら多少とも開明せられた或世紀の産物であることにもとづいて、多少とも完全な人間以外の何者でもないからである。」

哲學者達がこの作り話の馬鹿馬鹿しさを承認した時に——と云つても自然史に關する眞の知識を獲得したわけではないけれども——彼等は諸々の現象の原因を、本質(essence)や能力(potency)などと云ふ抽象的な表現によつて説明しようと思つた。このやうな表現は何物をも説明しはしなかつた。しかもそれらは存在であり古代の神々に代る新しい神であるかの如くに、論ぜられたのである。

それからなり後になつてはじめて、物體が相互に行ふ力學的な作用を觀察することによつて、この力學から數學が展開することのでき實驗が檢證しうる他の假設が引出されたのである。技術や化學に於ける長足の進歩が物體の化合をふやし、また社會の間の交通がヨリ密接になりつつ、地理學の知識がヨリ弘がり、事實がヨリ確實となり、技術の實行そのものが哲學者に見られるやうになつてから後にはじめて、物理學が惡しき形而上學に墮することを止めた所以のものは、ここにあるのである。印刷術、文藝および科學雜誌、アカデミーの記録は、詳細な點がまだ疑はしいだけだと云ふ位にまで、確實性を増加した。<sup>4)</sup>

3) cit. op. p. 118, p. 135, pp. 305-314.

4) cit. op. p. 315 et seq.

藝術——藝術の起源は人間の社會性に求められる。人間の喜びが外に「しるし」によつて表現されるところに音楽・舞踊詩などが生れてくる。繪畫や彫刻は歴史的にもしくは神話的な記念物を保存しようとする欲望の内にその起源がある。藝術の進歩についていま詳しく論ずることはできないが、テュルゴの注目すべき二つの思想だけを書きつけるならば、第一に、その進歩は「情操の繊細」によるものであり、第二に、藝術の進歩は、學問のそれと異つて、後のものが必ずしも先き立つものよりも價値が高いのではなく、大藝術家は後の時代のそれらの人と「ある平等性」をもつてゐると考へられてゐる。<sup>5)</sup>

技術——技術の進歩が起つたのは、後で詳しくのべるはずの進歩した「農業者の状態」と云はれる社會状態<sup>6)</sup>に於いてであるが、その特色は、學藝が様々な障害に逢つて進歩を妨げられたり衰頽したりするのは異つて、一度び發明せられ確立されると、單に維持されるのみならず、更には不斷に進歩を續けてゆくと云ふことである。なぜなら、技術は「取引の對象」となり、地球上に蒔かれた「發明の才幹」は必ずやそれを維持、進歩させるであらうから。五世紀以來のヨーロッパを支配してゐた「無智」の内にも、だから、技術は不斷に進歩した。航海術・商業技術・爲替紙幣・玻璃器・望遠鏡・羅針盤・火藥・水車・風車などの發明は、このことを裏書するものでなくてはならぬ。<sup>7)</sup>

道德および政治——これらの進歩は、精神に於いては、「非常に開明された自己に對する愛にすぎないところの正義と云ふものによつて支配されることに對する愛」に依存する、とテュルゴは云ふ。<sup>8)</sup>これが如何なるものであるか、どうして進歩するものかと云ふことは、我々が彼の社會進歩の理論を検討する時まで、保留しておかう。道德や政治に關する精神状態は、社會の環境を明かにしなければ、具體的に把握しえないものであるから。

5) cit. op. p. 305 et seq. p. 316 et seqq.

6) 續稿「テュルゴの社會進歩の理論」を參照  
Turgot; cit. op. p. 118 et seq.

7)

8) cit. op. p. 311.

以上はテュルゴの精神進歩の理論に對する餘りにも簡単な概観である。しかしこの概観によつても、彼の「進歩の理念」が常に歴史の示すところに則しまた經驗的事實に従つて、さうして極めて合理的に、立論されてゐることはほぼ了解せられるであらう。形而上的な一切のものを彼は廢棄しようとしたのである。しかしながら、不斷に繼續的に、無限に完成に向つて進歩すると云ふこの思想の根柢は何に基けられてゐるのであらうか。人類と云ふ一つの「巨大なる全體」が幼年時代と進歩とを持つと云ふならば、それはまた當然老年時代を持つてよいわけではないか。このやうな疑問に對しても、我々はテュルゴの社會進歩の理論を尋ねた後で、若干の省察を行ふであらう。

最後に私は極めて重大な一つの論點に觸れなければならぬ。

それは、上に概観されたやうな進歩と云ふものは、なる程人類の進歩であると稱されてゐるとは云へ、正當にはヨーロッパ人を中心としあるひはヨーロッパ人を頂點にいたるところの人類の進歩が意味されてゐると云ふことである。従つて精神についても社會についても、人類を代表するものはヨーロッパに於けるそれらなのである。かかる思想はテュルゴがヨーロッパ以外の社會や人間について全然考慮しなかつたから生じたものでは決してない。正に逆に、彼が東洋やアメリカとの對照に於いて、當時のヨーロッパの人と社會とを擬視したからこそ、この思想は成立したのである。然らばそれはどうしてであるか。一口で云へば、それはヨーロッパ人のみが眞に人間性の本質を自覺してゐると云ふことが「事實に基いて」云ひえられるからである——かくテュルゴはこの問に答へるのである。私は以下この答への意味を傳へようと思ふ。

キリスト教は人類に對して始めて「神の愛」を教へた。キリスト教の成立以前の世界に於いては、獨りユダヤ

人のみ純潔であつた。しかし彼等は自らの財寶を制限した。また彼等は「神の愛」と人の愛とを混同してゐた。

「神の愛」を民族の制限から解き、人の愛から純粹に區別したのはキリストであつた。キリスト教は「聖なる宗教」である。「この世に於ける我々の至福の最も純潔なる源泉」である。<sup>1)</sup>——人間の社會生活には法と權威とが必要である。けれどもそれらを人間が保持し人間がつくる時は、人間の「自愛心」のために、社會を混亂させ人間性を墮落せしめたと云ふことは、古代史の實證するところである。そこでは、哲人のかす多くの研究も立法者の懸命の努力も、遂に人間の「根本惡」(The vice fundamental)を交除することはできなかつた。立法者が私慾を離れたと云つても、それは多數者の意見に追隨することを意味し、この多數者は個人よりも一層貪慾であり無良心であつた。また彼が社會の利益を念頭に置くと、常に人類の利益を忘れてしまつてゐた。「法を人類の利益に立ち戻らせるためには、人間を自身からまた彼等を取りまく一切のものから高めるところの一つの原理が、なべての國民と凡ての状態とを、公正な目でまた云はば神自身の目によつて、熟視することをゆるすところの一つの原理が、必要であつた。さうしてこのことはキリスト教がひとり爲した事柄である。」ゆゑにキリスト教は漸次普及した。キリスト教が支配する社會は、支配者もまたこの眞理を理解したから、そこは人間性と正義とが實現するところである。自由が與へられる社會である。人間に「眞理の進歩のための鋭敏なる情熱」を感得させたのも、ほかならぬこのキリスト教であつたのである。<sup>2)</sup>

かくて、人間性の自覺をうながしたのもキリスト教であつたし、精神の進歩にあづかる諸條件を造つたものもこの「聖なる宗教」にほかならなかつたことがわかるであらう。テュルゴはこのやうに考へた。だからヨーロッパ人は幸福であり、「キリスト教の限界が優良な政府と公共福祉の限界であるやうに思はれる。」<sup>3)</sup>

ところでヨーロッパ以外の土地、例へば東洋では人間精神はどのやうな状態に置かれてゐるのか。——そこでは進歩は衰頹してゐるか固定してしまつてゐるかしてゐる。例へばモハメット教の熱狂性と破壊性とは、トルコ

1) cit. op. pp. 194-201.

2) cit. op. p. 199, pp. 205-211.

3) cit. op. p. 213.

の政治組織のすみずみまでも毒して、本来自づと進歩すべき「技術」をすら進歩せしめないでゐる。これは精神の衰頹してゐることを示してゐるにほかならない。また支那の專制政治の下に於いても自由なる精神は存在しない。それは「束縛された精神」(Esprit borné)となつてゐる。學問は保護されてゐるとは云ふものの、それは「神祕化」され、「迷信」に墮落し、また「恥づべき不正利得および卑劣なる獨占の對象」と化してゐる。ここでは精神は固定してゐるのである。テュルゴが支那人に就いて述べる次の比喩は、實に適切なものと云へるであらう。曰く「支那人は餘りに早く固定してしまつてゐる。彼等の中には、幹をとめられてゐる樹のやうな人がゐる。その人達は根から枝を延ばしてはゐる。けれども彼等は永久に la mortelle の内にゐるのである」と<sup>4)</sup>。この最後の言葉は恐らくはテュルゴの解した中庸の意味ではないであらうか。最後に私はアメリカについて簡単に觸れておかうと思ふ。テュルゴはアメリカの土人の多くがヨーロッパの移住者たちの慘虐の犠牲になつたことを知つてゐる。そこで彼はアメリカに呼びかけて云ふ、「何と云ふ恐怖と殘虐との場面を我々は君達のところで知つてゐることか！」しかしたちまち彼はそこから眼を外して瞑想するのである。「あ！この怖しい光景から眼を轉じよう！眼をアメリカ内陸の巨大な沙漠に投じよう！ここには利益や野心の手引を受けた征服者も早ぬない。多くの危地を越えて、方々で、幸福にしてやらうと思ふ未開人を追ひ求めてゐるのは、イエス・キリストの精神から激勵を受けてゐる宣教師たちである。」彼等によつて未開人はキリスト教徒となり、土地は勤勉に耕され、平等は實現されることであらう。だから、とテュルゴは呼びつづける。「幸福な人々よ！君等は最も深い暗黒から最も文明開化せる國民のそれよりも更に大いなる至福へと一度に引上げられてゐるのだ。……ヨーロッパの怒を嘆くの止めるがよい！世界の人々よ！競ふてキリスト教に歸依するがよい！」<sup>5)</sup>

テュルゴの精神の進歩の思想の根柢には、かくの如き宗教觀とそれに基づく世界像とが藏されてゐたのである。これは一體いか云ふ意味を持つものであらうか。我々はかかる研究を、更にテュルゴに於ける社會進歩の理論を展開し、彼の「進歩の理念」を總括的に檢討することによつて、行ふであらう。

4) cit. op. p. 133 傍點は筆者のもの。  
5) cit. op. p. 205 最後の一句のみは意味を取つて縮められてゐる。